

OE Freond について

佐々部 英 男

‘We aren’t lovers, we are friends’.

Lawrence, *Sons and Lovers*

1

OE の文学を ME 以降の文学とくらべてみると、著しい相違の一つは恋愛感情の乏しさであろう。ベーオウルフを頂点とする OE 詩が、正しく頭韻をふみリズムシカルに語られるとき、十分鑑賞に堪えるものであることは、Norman Davis 教授録音のレコーズ *Beowulf*^① が証明している。にも拘らず *The Anglo-Saxon Poetic Records* 六巻のなかで、恋愛詩といわれるものは、*The Wife’s Lament*, *The Husband’s Message* および *Wulf and Eadwacer* の僅かに三篇である。これは ME 以降の文学にくらべてたしかに物足りなさを感じさせる。しかし同時に、OE 詩にいくつかの興味ふかい愛の表現があったことは記憶されてよいであろう。例えばシェイクスピア作品集に収められている *The Pious Pilgrim XI*^② を引用してみよう。

Venus with Adonis siting by her

Under a myrtle shade began to woo him;

She told the youngling how god Mars did try her,

and as he fell to her, she fell to him.

“Even thus”, quoth she, “the warlike god embrac’d me,”

And then clipp’d Adonis in her arms.

“Even thus”, quoth she, “the warlike god unlac’d me”,

As if the boy should use like loving charms.

“Even thus”, quoth she, “he seized on my lips”,

And with her lips on his did act the seizure;

And as she fetched breath, away he skips,

And would not take her meaning nor her pleasure.

Ah, that I had my lady at this bay,

To kiss and clip me till I run away!

内容の説明は省くとして、この注意したところでは最後の “To kiss and clip me” である。この二つの動詞は *The Wanderer* の語彙の colloquial idiom であるが、その経過については既に紹介した。

その中、OE *heals-gebedda* は「腰を抱く」と一緒に床に臥す相手」といった意味である。 *heals-mæged* は

文字の *neck (ing)-maiden* である。『*Wanderer*』に見られる *myne* は、ドイツ語 *Minnesinger* の *Minne* (中世騎士時代の愛) に相当する。

しかし、今日残っている作品では、これらの表現の頻度は限られている。より基本的な単語として特に注意すべき語は、現代英語の *friend* にあたる *freond* ではないかと思う。現代英語の場合と比較して、以下 OE *freond* に比べて考えよう。

11

冒頭に引用した ‘*We aren’t lovers, we are friends*’ は *Sons and Lovers* ⑤で Paul が Miriam に語る言葉である。この場合、ロレンスは明らかに *lovers* と区別して *friends* を使っている。これが普通の用法であることは、*OED* の定義によっても裏づけられる。

friend 1. ‘One joined to another in mutual benevolence and intimacy’ (J)

Not ordinarily applied to lovers or relatives.

J 即ちジョンソン博士の定義を *OED* がよく引用しているのにも注目されるが、‘not ordinarily’ とする但書は、裏を返せば、場合によっては *lovers* と *relatives* にも適用可能なことを示している。事実、Paul の言葉にも拘らず、異性間の *friends* は *lovers* に極めて移りやすい。

friend=*relative* は *friend*=*lover* と *OED* は 4. a lover or paramour, of either sex. *obs.* である。Caxton 以来の数例を挙げよう。これは OE *freond* に比べて考えられる。

OE *Freond* に比べて

OE freond にかんしては、異性間の friend が lover に移りやすい傾向とは別に、語源意識が必要であろう。語源からいえば、freond は動詞 free(ga)n (love) の現在分詞であるから、本来の意味の変化は lover から friend へであつた筈である。問題は OE 時代の人々が、この語源をどの程度意識していたかということになるであろう。現在の friend と OE freond の相違を解く鍵もそこにあるといえる。もちろん、確実な尺度は得られないにしても、或程度の手がかりは求められないであらうか。

三

語源意識といつても、篇局の語源は筆者の手に余ることであるし、また差当つてはその必要もないであらう。むしろ、比較的近い過去の視点から OE freond を眺めることによって、何かが得られるのではあるまいか。そのような予想から、福音書のゴート語訳（以下 G. と略す）と OE 訳および欽定訳（A. V.）を比較してみた。

Mark 12, 30. A. V. Thou shalt *love* the Lord thy god.

G. *Frijos* frauþan gup þeinana.

OE. *Lufa* þinna Drihten God.

Matt. 5, 44. A. V. *Love* your enemies.

G. *Frijop* fijands izwarans.

OE. *Lufiað* eowre fynd.

Mark 10.21. A. V. Then Jesus beholding him *loved* him.

G. Ip Iesus insailhands du imma *frijoda* ina.

OE. Se Hælend hine þa behealdende *lufode*.

John 11.11. A. V. Our *friend* Lazarus sleepeth.

G. Lazarus, *frijonds* unsar, gasaizlep.

OE. Lazarus ure *freond* sleepð.

John 15.13. A. V. Greater *love* hath no man than this.

G. Maizein þizai *friapwai* manna ni habaiþ.

OE. Næft nan man maran *lufe* þonne ðeos ys.

にたを愛ひたるものより大なり。

A. V. friend love(v) love(n)

G. frijonds frijon friapwa

OE. freond lufian lufu

語の G. frijonds は OE freond に相当するから、動詞では G. frijon に相当する OE freeo(ga)n のから OE lufian を使われ、名詞では G. friapwa に相当する OE friod をあてて、拘まる OE lufu が使われ

OE Freond にてしむ

れている。いいかえれば、ノース語 *friion* は散文で使われているが、OE *freo(ga)n* は OE 末期の散文である福音書訳では用いられていない。Sweet, Klaeber などのグロスにも *freo(ga)n* や poetic な語として、OE 詩でも八例が見出されるに過ぎない。

Nu ic, Beowulf, pec

secg belsta, me for sunu wille

freogan on ferhpe.

Beowulf, 946~8.

now, Beowulf, best of men,

in my heart will I love thee as a son.

J. C. Hall's Translation

これにたうて、Iufian は OE 詩で五十例以上残っている。Madden and Magoun: *A grouped Frequency Word-List of Anglo-Saxon Poetry* によると、*leof*, *Iufu*, *Iufian* のグループでは合計四十二にたうて、*frio(ga)n*, *friond*, *friod* のグループは十四で、ほぼ三分の一の頻度になっている。

freo(ga)n と *Iufian* の対立は、ME になると *nimen* と *taken* のそれを連想させる。ただこの場合 *Iufian* からの各語 *lover* は比較的少ないこと、*OED* では十三世紀以降である。OE *freond* にたうて *love* グループの語は形容詞 *leof* (beloved, dear) である。この語は OE で非常に多く用いられ、*leof mann* は ME *lemman* などの archaic であるが *leman* として今日の辞書にものっている。なお *lover* が初期近代英語では *friend* 程度の意味でも用いられたことは興味をかい事実はある。

この対立は、*fiend* の意味が限定された今日では失われているが、OE *freond* を考える手がかりになるであろう。一方の *feond* が、OE では今日の *fiend* と同時に、広く *feon(h)ate* する者、*foe*, *enemy* の意味で使われている以上、他方 *freond* も語源的な *freon* (*love*) する者の意味に用いられたことは当然予想される。*freond* and *feond* では、「己を愛する者」を憎む者」という意味を経て、味方と敵になったと思われる。その愛が男女間といった状況では、OE *freond* が現代英語の *lover* におきかえられる意味をもっていたとしても不思議ではなう。OE *freond* = *lover* の説は、*OED* には言及されていないが、*Toller: Supplement to Bosworth's Anglo-Saxon Dictionary* や *Sweet, Hall* の各辞書には記されており、最近では鈴木教授の古代英詩「哀歌」や *Oxford Dictionary of English Etymology* などにも見られる。Wrenn 教授の *A Study of Old English Literature* ⑧では特に強調されている。

We should not forget that in Old English poetry *freond* may mean a *lover*, and not merely a *friend*, as in prose and in the later language.

これは OE 詩においては散文におけるよりも古い時代の言語が保存され、*freond* も語源に近い意味で使われていたためと解せられる。

更に OE 詩の韻律法では、現在分詞 *-end* も *half lift* (半強勢) をもつことがあったとされている。⑨差当って、筆者にこの問題を十分に取扱う用意はなうが、*friend* [*fre:nd*] と *freond* [*fre:ond*] の違いは、発音、韻律の面からの考察も必要であろう。

五

OE freond についての管見は大体以上で尽きる。以下いくつかのテキストについて、今日の friend と意味のつれが感じられるものをとりあげてみたい。

(1) Ne waes þæt gewrixle til,

þæt hie on ba healfa bigan scoldon

freonda feorum !

Beowulf, 1304-6.

いつれの側においても、愛する者の命であがなわねばならなかったその取引はよいものではなかった。

グレンデルを失った仕返しに、母親の妖怪がヘオロトの館を襲い、フローズガールの愛する家来アシュヘレをさらっていった後のくだりである。freonda はフローズガールにとっては忠臣アシュヘレであるが、母親の妖怪にとっては息子グレンデルである。したがってこの freonda を多くの英訳に見られるように、friends と訳したのでは不十分に思われる。ベーオウルフには計八回の freond が使われているが、J. C. Hall はこの箇所だけを loved ones と訳している。

(2) Geomor siððan

OE Freond について

fæder flētgestald freondum dælde

swæsum and gesibum, sunu Jafēdes.

Genesis, 1610-3.

後にヤペテの子ゴモルは愛する者、

親しい身内の者に父祖の宝をわかった。

Gomer はノアの孫で創世記十章二、三節に名前がみえる。但し OE 詩 *Genesis* の一節は全くの潤色である。二行目後半の *freondum* は次の行で *swæsum and gesibum* といいかえられており、内容からも単なる *friend* ではない。OE 詩には合成語を除いて五十余の *freond* が残っているが、一四例までは *Genesis A* にみられる。この例と二〇一〇行の例が注意をむく。

(3) Ides sceal dyrne cræfte

fæmne hire freond gesecean, gif heo nelle on folde gefepon

þæt hi man beagum gebiege. *Maxims II*, 43-5.

女は世間で首尾よく財宝によって買いとられることを欲しないならば、ひそかに恋人を求めるべきである。

この一節については、*Anglo-Saxon Poetic Records Vol. VI* にいくつかの解説が紹介されているが、全体の意味は必ずしも明瞭ではない。結婚で売り買いされるのが嫌なら、恋人と駈落ちせよという格言であろうか。今

日普通に使われる gift の OE では marriagegift (by the bridegroom); (pl.) nuptials, marriage である。いづれにせよ freond は恋人と見るのが適切であろう。Sweet's Anglo-Saxon Reader では改訂者の Onions の Whitelock もこの箇所だけを lover と訳している。Toller の辞書でもこの箇所を Juliana 一〇二行の二例を friend = lover の意味にとっている。

(4) Frynd sind on eorðan.

leofo lifgende leger weardiað,

þonne ic on uhtan ana gonge

under actreo geond þas eorþscrafu.

The Wife's Lament, 32~6.

恋人はこの世にあって愛する人々は床にいつている時、明け方ちかく私はただ一人かしの木のもとの洞穴を歩きまわぬ。

夫とひき離され幽閉の身にあって、世の幸福な恋人とわが身をひきくらべて語る妻の歎きである。Leslie^⑧の註を引用しておく。

The reference to *frynd* lying abed, in contrast to her own loneliness, suggests the meaning 'lovers' for *frynd* here, for she is thinking of the relationship between herself and her husband.

- (5) Her bið feoh læne, her bið freond læne,

her bið mon læne, her bið mæg læne.

The Wanderer, 108~9.

この世では言もはかなく、友もはかなく、男もはかなく、女もはかない。

この一節には、もちろん別の解釈もあり、断定はむづかしい。ただ Wrenn 教授^⑤にしたがえば、freond はやはり lovers を意味し、feoh (言) のはかなさに対し、sexual love のはかなさを意味する。次の行の mæg を maiden の意味にとり、この二行だけきりはなしてきえれば、興味ぶかい解釈といえるであろう。

- (6) He bið þam godum glædmōd on gesihpe,

wihtig, wynsumlic, weorude þam halgan,

on gefean fæger, freond ond leofrael.

Christ, 910~2.

He (Christ) shall be joyous in aspect to righteous men, fair and pleasant to the holy host — lovely in his gladness, *friendly* and gracious.

R. K. Gordon's Translation^⑥

テキストの釈解に間違ひがなければ、これは訳語 friendly に示されているように、freond や freon からの

形容詞として使われている OE 詩唯一の例である。

(7) Is nu [fornumen] swa hit no wære,
freondscipe uncer. *The Wife's Lament*, 24~5.

われわれ二人の愛はあたかもかつて

なきがごとく 奪われてしまった。

前述の恋愛詩の一節で、この freondscipe はこの詩の語り手である妻と夫との関係を表しているのだ、Leslie^⑨のように love の意味にとりたい。

六

以上の例ですべてをつくしたわけではないが、多くのグロサリに見られる freond : friend を顔面どおりに受取ることの危険は理解されたであらう。OE freond には主君と家来、男と女、親と子といったコンテキストに応じて、柔軟な解釈が求められる。

更に、この問題を十分に論ずるためには、現代人と中世人との思考の相違、人間関係の変化などへの考察も必要になってくる。筆者にそれだけの用意はないが、*The Wanderer* などに見られる freondleas (friendless) とか freonda feascraft (desitute of friends) とした表現が、非常に堪えがたい気持あるいは状況をあらわしていたことは間違いないであらう。

〔註〕

- ① Spoken Arts 918, N. Y. Beowulf read in Old English by Norman Davis and Nevill Coghill.
但し抜粋である。
- ② この例は同僚蜂谷昭雄氏のご教示による。
- ③ 英文学評論第二十三集の拙稿「古英語における愛の一表現」。
- ④ Penguin Books 社の二三頁のトから二行目。
- ⑤ 中島文雄、寺沢芳雄共編「英語語原小辞典」(研究社)参照。
- ⑥ Op. cit. p. 21.
- ⑦ Wrenn 教授の前掲書三九頁参照。
- ⑧ Leslie (ed.): Three Old English Elegies, P. 56.
- ⑨ 同教授の tutorial での意見である。
- ⑩ R. K. Gordon : Anglo-Saxon Poetry, (Everyman's Library), p. 165.
- ⑪ Op. cit: p. 61 and p. 79.